

里山環境の再生モデルとしてのストローベイル・ハウスの可能性

（仰木八王寺山農業小屋（交流施設）の自力建設を通して）

大岩 剛一・大原 歩

里山環境の再生モデルとしてのストローベイル・ハウスの可能性

〓 仰木八王寺山農業小屋（交流施設）の自力建設を通して〓

大岩剛一・大原 歩

はじめに（研究の概要と目的）（担当…大岩）

成安造形大学附属近江学研究所における近江学研究「里山〓水と暮らし」が始まったのは二〇一〇年度である。本研究は、その第一期「水系からみる集落の空間構成・景観要素に関する研究と聞き取り調査―大津市仰木地区―」の成果を受け、第三期「仰木八王寺山〓地域交流拠点〓自力建設プロジェクトに関する研究」として二〇一二―一三年度にかけて実施したものである。

近年、仰木地区（註）では一部地域住民による棚田ボランティアの受け入れや棚田オーナー制度等の保全活動が進み、近郊都市からの参加が増加している。また、大学と連携した研究活動や里山保全活動、地場産野菜の販売による地域への発信の試みも始まっており、地元での活動を広げ、新たなコミュニティを創造するための体制づくりが急務となっている。本研究はこれを受け、上仰木地区の「八王寺組」（第一章―参照）が進めている地域活性化活動「仰木自然文化庭園構想」の一環としての小屋（拠点）づくりに協力するかたちで行った。

研究の内容は「地域の素材研究、及びその成果を生かした建

Title :

The Potential of Straw-Bale Houses as a Model in the Regeneration of the Environment of “Satoyama”

Summary :

Here I will report on my work in the rural community of Kamiogi in Otsu City, Shiga Prefecture. The theme of my work is the connecting of people, nature and region through the construction of straw-bale houses by the residents themselves.

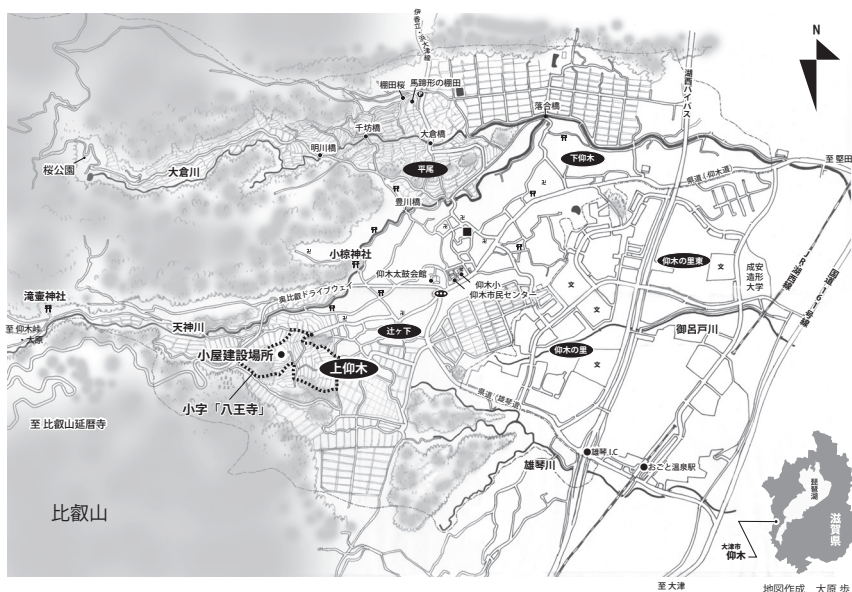


図1：建設地と仰木全体地図（大原作図）

築・景観計画の提案と建設の監修」、そして八王寺組が主体となつて進める「自力建設の報告とその成果」である。これは近江学研究第一期、二期の研究成果である「暮らしとコミュニティのかたち」の具現化であり、大学（本研究所と学生）と地域住民が一体となつて行う、地域に根ざした新たなコミュニティ創出のための実践的な研究活動である。同時に、私が一九九九年来研究を続けているストローベイル・ハウス（straw-bale house）が、温熱環境面のみならず、人と自然と地域をつなぐ里山再生の建築モデルとして有効であるかを問う研究でもある。また本研究は、二〇一二年度に担当した本学学生対象の半期ごとの授業、「プロジェクト特別実習A3」（前期）および「プロジェクト特別実習A4」（後期）として行い、二〇一三年度は永江弘之准教授担当の同実習に特別講師として協力した。

〔註1〕大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数八〇一戸、人口二、三三五人（平成二五年四月一日現在）の、上仰木、平尾、辻ヶ下、下仰木の四つの字から成る大きな農村集落である。仰木の集落形成の歴史は約二二〇〇年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路（国道161号線）から西へ分岐し、若狭街道、いわゆる鯖街道へと抜ける間道「仰木道」の途中に発達した。東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる

第一章 上仰木地区における里山再生の試み

一〇一 仰木の里山と八王寺組（担当…大原）

仰木地区を構成する四つの字の中で、比叡山に最も近く標高が高い位置にある上仰木。二〇〇二年から八年かけて棚田の約七割がほ場整備されたが、急峻な山間地にある一部の棚田は対象外とされたため一部残されている。今回の研究対象である八王寺山周辺も昔ながらの棚田が残された地区である〔註2〕。

「仰木自然文化庭園構想八王寺組（以下八王寺組／会長…上坂雅彦）」は、農業組合員と農業組合OBが集まり、荒れた耕地に公園や果樹園をつくるなど自分たちが思い描く田んぼのあり方を話し合ったことがきっかけで構想が練られた。さらに、その提案を受けた上仰木・辻ヶ下地区が地域ぐるみで農村活性化委員会を組織、二〇〇七年二月に発足し、活動の中心地である字名から「八王寺組」と名付けられた。構成員は三五名。中心メンバーは四〇〜五〇歳代で、農業従事者としては若手に当たる〔註3〕。

当初は地域の魅力を再発見するためのハイキングなどに取り組んでいたが、滋賀県が取り組む棚田保全ネットワーク推進事業の一つである「棚田ボランティア」の受入れ（平成二十一年度〜）と「棚田オーナー制度」を軸に活動を開始（平成二十二年度〜）した。生産の場であると同時に生活の場としての棚田を取り戻す活動として、都市住民の協力を得た持続的な棚田保全活

動のあり方を模索し始めている。

〔註2〕上仰木土地改良区による基盤整備促進事業（ほ場整備）／二〇〇二年に認可を受けてほ場の整備事業を開始し、二〇一〇年に竣工した。整備実施面積は四五・七ha。急峻な傾斜地につくられた棚田は整備からはずされたが、今回の建設地である小字八王寺の一面はその一部に当たる

〔註3〕八王寺組の組織構成：会長一名、副会長二名、事務局（幹事一名、相談役、監事、指導員各二名）、顧問（仰木学区自治連合会長・上仰木自治会長・上仰木農業組合長・辻ヶ下自治会長・辻ヶ下農業組合長）

参考文献・資料

- ・ウェブサイト「仰木自然文化庭園構想 八王寺組」<http://kaniog.jp/>
- ・「中山間地稲作経営への模索―仰木自然文化庭園構想八王寺組の活動について」〔近江米情報〕第44巻第4号〜通巻222号、近江米振興協会発行 http://www.ohminai.jp/news/koho_file/222.pdf

一〇二 ストローベイル・ハウスと八王寺組（担当…大岩）
ストローベイル（straw-bale）とは直方体に圧縮した藁のブロックのことである。このブロックを積んで壁をつくり、土を

塗った建築がストローベイル・ハウス (straw-bale house) で、十九世紀後半に森林の少ない北米の牧草地帯に移住した入植者が、不足する材木の代わりに最も身近な素材である麦藁や干草をブロックにして家を建てたのが始まりである。およそ二五年ほど前からその価値が見直され、今や環境に負荷をかけない持続可能な建築(二二二三参照)の代表格として、北米、オーストラリアを始め、アジア、ロシアからヨーロッパに至る世界各地に広がっている。私は一九九九年よりストローベイル・ハウスの研究を始め、国内での普及をめざして全国各地で講演活動や建設に向けた一般参加型ワークショップを実施してきた。

地元での活動を広げ、新たなコミュニティを創造するための体制づくりを進める八王寺組にとって、交流拠点の建設は大きな目標の一つであったが、二〇〇七年、発足直後の八王寺組からストローベイル・ハウスに関する講演依頼がきた。同年十一月に上仰木自治会館で行った「八王寺山を考えよう」藁の家で「まち興し」(「上仰木農業組合おはなし会」仰木自然文化庭園構想八王寺組主催)と題する講演会をきっかけに、二〇一二年の着工と自力建設に向けた準備がスタートしたのである。建設用地も決まり、八王寺組との具体的な打合せと現地調査が始まったのは二〇一二年三月である。同年四月から小屋の計画案作成に取りかかった。



ベイラー(圧縮梱包機)付きトラクターで広いほ場を走ってストローベイルを作る



稲藁のストローベイル



ストローベイル・カフェ(大岩設計、2001、東京)



ストローベイル・ハウス(大岩設計、2004、山梨)

第二章 施設概要（担当…大岩）

二・一 建設地と建物の配置

建設地は、元三^{さん}天師^{てんし}の石造道標がある京都大原に至る仰木道^{ようまち}と横川^{よなわ}への登り口との分岐点（註・参照）の南側の、ひととき目立つ小山のような高台に位置している。標高約二四〇メートルの南縁を桜に縁取られた東西に細長い敷地は、八王寺山の森を北に控え、眺望が南に大きく開けている。急峻な崖に接した敷地の南縁からは、眼下に昔ながらの小さな棚田が重なるように広がり、その先に遠く琵琶湖から対岸までを望むことができる。

施設の配置計画は、以前より敷地内にあった公衆便所とご神体のない社、敷地のほぼ中央の一本の山桜の位置を考慮し、雄大なランドスケープと敷地形状を生かした、南に開いた建築として構想した。住所は滋賀県大津市仰木二丁目字八王寺一六二番（地目は田）。地籍一、一七〇平方メートル（水路部分九・九一平方メートル含む）のうち、建物を含む一八六・三平方メートルのエリアを対象に大津市農林水産課に用途変更届を提出、「農業用倉庫」として申請した。認可が下りたのは二〇一二年九月。九月二二日に地鎮祭を行い、十月に着工した。



右手小さな社の手前の山桜と手前の公衆便所との間のスペースが建築予定地



仰木道から八王寺山を望む。円内が建設地



建設地での地鎮祭。中央に八王寺組会長の上坂雅彦氏、後方が棟梁の暉彦氏（雅彦氏父）



敷地の南端からの雄大な眺め。眼下に棚田。遠く琵琶湖を望む

二二一 建築の目的と概要

二二二 施設の目的

八王寺組は、棚田ボランティアの受け入れや棚田オーナー制度等の保全活動を精力的に推進してきたが、その結果、大津市内を中心に京都、大阪等の都市部からの参加が増加し、里山保全活動を通じた地域交流も盛んになっている。本施設は法的には農業小屋であるが、単に棚田ボランティアのための休憩場所や農具等の収納場所としての機能を越えた、地域交流の拠点としての多様な機能が求められている。

例えば、地域住民のためのお月見会や映画上映会、餅つき、縄縫い教室（注連縄づくり）を始め、草刈ボランティア等に参加する代わりに学生たちに場を提供する貸ギヤラリー、さらには地域住民と都市住民、学生による交流会等の様々な利用が考えられている。すなわち、新たなコミュニティを創りながら地域の活動を活性化させていくための多目的な機能である。棚田の消失に歯止めをかける手立てとして有効であり、同時に今後の農業のあり方を考える上で不可欠な文化的機能であるといえる。

二二二 建築概要

建物の構造は在来木造軸組構造平屋建てで、間口五間（九メートル）×奥行二間（三・六メートル）の東西に長い長方形平面をもつ。屋根は眼下に広がる南の眺望を意識し、北から南に下

がる片流れとした。南面には間口五間、奥行四尺ほどの広い庇下の外部空間を設けた。ここは山桜の根元に設けたデッキと共に、さまざまな人のつながりが生まれることを想定した縁のスペースである。

室内は、予測される多様な機能に対応できる広いフリースペースと農機具等を収納するバックヤードが、一続きの三和土で連結している。入って正面の壁は土で仕上げたストローベイルで、上部には北側の森が望める通風用の高窓がある。ストローベイルの壁はその厚み（四七センチ）を利用して二つのニッチを設け、ベンチにした。

建築面積—四三・二〇 平方メートル（二三・一坪）

延床面積—三二・四〇 平方メートル（九・八坪）

最高高さ—三・二三メートル

外部仕上—屋根…小波鉄板葺き／軒裏…野地板杉（厚一五）

現し／外壁…焼杉板張り／基礎立ち上がり…コンクリート打放し（※単位ミリメートル）

内部仕上—床…三和土／壁…杉板（厚一五）張り、一部稲

藁ストローベイル（幅七〇〇×奥行四二〇×高さ

三一〇）をシュロ縄で固定の上、土塗（厚五〇）

／天井…野地板杉（厚一五）現し／間仕切壁…杉

皮葺き（※単位ミリメートル）

開口部—木製建具／高窓…ポリカ（小波、透明）

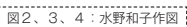


図4：断面詳細図

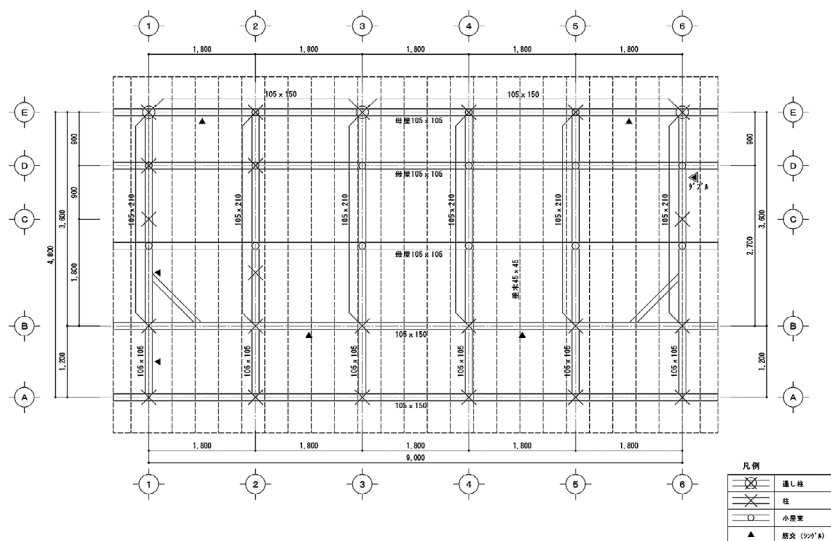


図5：水野和子作図

図5：小屋伏図

二二二三 ストローベイル建築をつくる意義

1. 低エネルギー・環境循環型の建築

ストローベイルには、毎年必ず収穫される稲藁や萱、干草など、身近な場所に生育する植物を使用するため、材料の調達から運搬、製造、加工の全過程を通じて多大なエネルギー（化石燃料等）を使わずに建設できる資源効率に優れた素材である。また、藁は古くから日本の生活文化のリサイクル素材の主役として、本来的に廃棄とは無縁の、最後は大地に還る循環型の持続可能な素材である。

2. 省エネルギー建築

藁と土でできた厚い壁には高い断熱性と蓄熱性があり、熱効率に優れている。また合板やボード類を使わないこの壁は調湿性にも優れ、壁が湿気調節をする。太陽エネルギーによって室内の温熱環境を調節するのでエアコンへの依存を減らし、木質系燃料（バイオマス）による暖房への道を開く。

3. 健康によい建築

優れた調湿性は室内環境を良好に保つので健康にも良い。有害な化学物質を使わないので身体への負荷が小さい。遮音性も高く、室内は清浄な空気と静けさを保つことができる。

4. 人と人をつなぐ建築

ストローベイル・ハウスは建主が率先してワークシヨップを企画する。中でも藁積みと土塗りの工程は、大人や子供、地域住民や素人のボランティアが自主的に施工に参加するこ

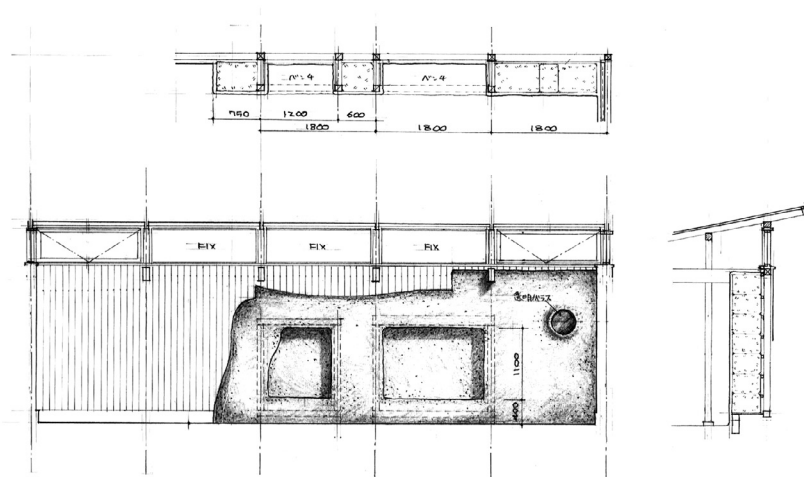


図6：大岩作図

図6：室内展開図（北面）

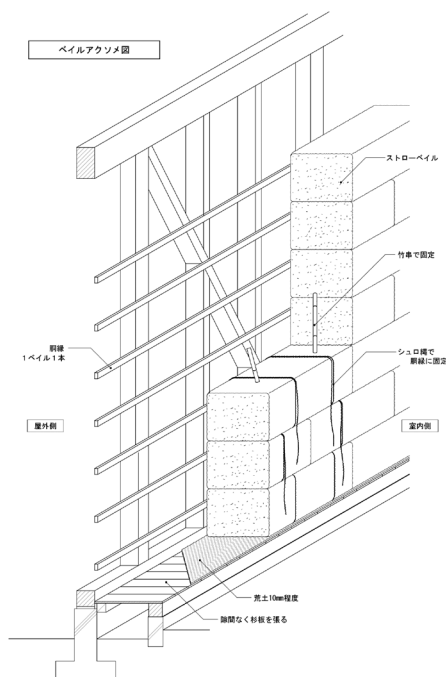


図7：ストローベイル壁の作り方

図7：水野和子作図

とができる。人と人のつながりを生み、建物への愛着を育み、ものづくりの喜びを知ることができるため、地域住民に愛される、地域に根ざした建築を可能にする。

5. 人と地域をつなぐ建築

ストローベイル・ハウスは材木と稲藁を中心に、土、石、竹、ヨシ、萱などの、地域に固有の素材を組み合わせ、地元の人たちのエコロジカルな知恵と伝統的な技術を取り入れてつくる。地域を見つめ直す建築として、地域資源の掘り起こしと地場産業の創出、地域活性化への道を開く。

三二一 素材の採取と加工

三二一 土

採取場所…上仰木小字北谷の休耕田

二〇二二年六月二四日に八王寺組と成安造形大学学生、大岩、大原が共同で荒土をつくった。



土を採取する八王寺組のメンバー



土に藁サを混ぜて荒土作り

三二二 稲藁とストローベイル
収穫場所…平尾地区、上坂暉彦氏のほ場

上仰木地区八王寺、棚田オーナーのほ場

二〇二二年九月一日に八王寺組、成安造形大学学生、大岩、大原が共同で稲刈をした。収穫後、同ほ場にて稲架を組み、稲架掛けによる天日乾燥を行った。後日、八王寺組が収穫した稲藁をトラックで愛知県弥富市に運び、ベイラー（干草用圧縮梱



3 / 稲架掛け



1 / 稲刈



4 / 干した藁は乾燥後ストローベイルにする



2 / 稲架作り

包機）を借りてストローベイルを製造した。今回施設に使用したストローベイルは計四三個であった。

三二二三 木

伐採地…「上仰木辻ヶ下生産森林組合」が管理する小字大久保

の共有林／伐採者…八王寺組

上仰木と辻ヶ下によって共同運営される「上仰木辻ヶ下生産森林組合」が、山の健全な育成を目的に管理している共有林の杉とヒノキを使用した。土台と柱にはヒノキを、すしかい筋遣、間柱、垂木には杉を使用。梁、桁、母屋については予算の都合上やむなく輸入材（米松）を使用した。二〇二二年十二月九日と一五日の両日、棟梁（上坂暉彦氏）と八王寺組会長（上坂雅彦氏）の指導の下、成安造形大学学生、大岩、大原、外部参加者により、構造材の刻み作業（ホゾ穴加工）を行った。二〇一三年一月二七日に建設地への資材搬入作業を合同で行い、上棟を迎えた。



鑿でホゾ穴を掘る棟梁



材木を伐り出した共有林（円内）



八王寺組会長より鑿の使い方についての指導を受ける



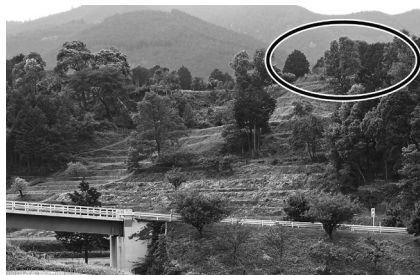
1 / 建設地への道が狭くて大型重機が入らないため、
人力で資材搬入



2 / 上棟は八王寺組のメンバーで



3 / 無事に上棟を終え、全貌を現した農業小屋



竹の伐採地（円内）

三十一四 竹
伐採地…上仰木地区放棄耕作
地周辺の竹林／伐採者…八王
寺組

第四章 自力建設の概要（担当…大原）

四― 自力建設の意義

本研究では、建設現場周辺自然环境、伝統文化と技術、暮らしのかたちをフィールドワークによって調査し、計画案作成作業を進めてきた。八王寺周辺のフィールドワークから始まり、仰木祭の見学、雄琴川での「生き物観察会」（仰木を守る会主催）への参加、建材の元になる素材の採集作業（第三章三「参照」）、木材の刻み、上棟、ストローベイル積み・土塗りワークショップを行った。

中でもストローベイル積み・土塗りワークショップは、地元農業者組合の四〇〜五〇代の若い世代や、優れた伝統技術に精通する地域の職人たち、そして地域を超えて、大学、棚田オーナー、棚田ボランティア参加者などに広く声をかけ、連携しつつ行われた。それは、仰木で行われてきた田仕事や屋根葺き、道普請などで近所が協働し、作業も材料も持ちつ持たれつで補い合う「結」の精神を思わせた。八王寺組会長の上坂雅彦氏が参加者への挨拶の中で言われた、「これは現代版の『結』だ」と思う。たくさんの方の気持ちつながる場所にしていきたい」という言葉に、本研究を通して、里山で現在起きている様々な問題に向き合っていくための、求心力のある拠点が生まれたことを感じた。



素材を探して仰木をフィールドワーク



活動の意義を伝える八王寺組会長の上坂氏



仰木の子どもたちと一緒に生き物観察会に参加

四二一 ストローベイル積みと土塗りワークショップ

四二一 ワークショップの概要

平成二五年八月十七日(土)、十八日(日)の二日間、小屋の内部にストローベイルの壁をつくるワークショップを行った。

主催は八王寺組、共催が成安造形大学。総参加者数は延べ八七名(一日目四七名、二日目四〇名)。成安造形大学からは学生七名、近江学研究所研究員五名、職員二名の計十四名が参加した。ワークショップの指導は、日本大学にて環境建築を研究し、ストローベイル・ハウスのワークショップを数多く手がけるカイル・ホルツヒューター氏(註4)に依頼した。



作業方法を解説するカイル氏(△)

〔註4〕アメリカ合衆国ウイスコンシン州生れ。ペンシルベニア州 Slippery Rock University 大学院博士前期課程終了。日本大学大学院生物資源科学研究科博士後期課程終了。現在、日本大学系長浩司研究室研究生。研究テーマは「ストローベイル建築の温湿度環境と壁内湿気対策」。日本各地でストローベイル構法の指導や左官工事に従事

四二二 作業詳細

〈作業工程 一日目〉

一日目の八月十七日(土)は、主に「下地作りとストローベイル積み作業」を行った。午前中は八王寺組と上仰木農業組合、成安造形大学スタッフが午後から行う一般公開ワークショップの準備を進めた。

(1) 材料準備

①作業材料(ストローベイル・土等)を運び込む。作業環境を整える。

②ストローベイルを固定するための竹串をつくる(長さ五センチ)。



藁スサに使う稲藁を搬入する(●)



先をとがらせて竹串をつくる(▲)

(2) 下地づくり

木部に塗る土の付着強度を高めるために、藁縄やシュロ縄を木部に巻きつける。



特製ストロー・ニードルにシュロ縄を通し(上)、
ペイルを分割する(下)(△)

④ 壁面デザインに合わせ、特注サイズのカスタム・ペイル
(custom bale)をつくる。



押切で藁スサを作る (●)

③ 土壁用の藁スサをつくる。

撮影者

- ：穴風 光恵
- ：今井絵理沙
- △：大原 歩
- ▲：永江 弘之

(3) 土づくり (下塗り用)

腐葉土に水と藁スサを混ぜ、
下塗り用の土をつくる。下地
には藁スサを少なめに混ぜ、
粘土質の強い土をつくる。



杉板に藁縄を巻く (△)



下塗り用の荒土と藁スサを足でこねて混ぜる (△)



ニッチ側面の壁下地作り (○)

(4) ストローベイル積み
竹串と藁縄で木部にベイルを
固定しながら積んでいく。



4 / ベイル1個当たり2本のシュロ縄を背後の横胴縁に縛り、ベイルを固定する (○)



5 / ベイルを固定したら、竹串を2本ずつ2段分打ち込む (△)



1 / 完成した木造部 (○)



6 / ベイルを積み上げる (△)



2 / 足元の板張りの上に土を薄く塗る。地面からの湿気を藁壁に伝えないため (▲)



7 / 積みあがったベイル (▲)



3 / 土を塗り終えたらベイルを置いていく (○)

(5) 木部の土塗り

中塗り土との接着剤代わりになるように、縄を巻いた木部の上から下塗り用の土を薄く塗りつける。

〈作業工程 二日目〉

二日目の十八日(日)は主に「土壁の仕上げ作業」を行った。午前中から、一般公開ワークシヨップとして行った。

(1) 土づくり(中塗り用)

二層目の土をつくる。下塗り土よりも藁スサの量を増やすことで強度を高める。



荒土に藁スサを混ぜる (△)



ニッチ奥の壁を塗る (▲)

(2) 中塗りと壁の成形

① 中塗り用の土を使い、ベイルとベイルの隙間を埋めて壁の形を成形する。

② 土壁のクラックを防ぐため、

広い面には竹釘を打ち込み、シュロ縄を張り巡らす。



(△)



(▲)

(3) 土壁の表現

① 壁の中のストローベイルを覗くための「真実の窓 (truth window)」を設置する。溝を切った四本の竹釘に硝子を挟んで固定する。



真実の窓 (truth window) の下地づくり (▲)

② 壁面右側にレリーフをつくる。

デザインは学生からのアイデアを採用。「真実の窓」を月に見立て、その下に広がる棚田を有機的な曲線で表現した。イラストレーション領域3年の留学生、ツリアンディカ・アンジャニのデザイン。



ツリアンディカ・アンジャニさんのデザインスケッチ (△)

(4) 仕上げ用中塗り土の土づくり

草刈機で粉碎した藁スサを水分を含んだ柔らかい土に大量に混ぜ、三層目の仕上げ用の土をつくる。



棚田のレリーフを造形するツリアンディカ・アンジャニさん (●)



(●)



(●)

(5) 中塗り土による仕上げ
掌で表面を撫でるように土を塗り重ねていく。光沢がでく
る。



(●)



完成した藁と土の壁 (△)

終わりに（担当・大岩）

住まいとはもともとその土地の気候風土で育った材料と、地域に蓄積された豊かな知恵と技術によってつくるものであり、かつてはどの地域にも結と呼ばれる相互扶助組織があつて、家族、親戚、近所の仲間が協力し、裏山から材木や萱を伐り出して家を建てていた。そのため、集落の景観には地域の素材が生み出す統一感があつた。

仰木の里山には、建築（家づくり）が農的世界と分かち難く結びついていた時代の豊かな技術の記憶が、未だ枯れることのない水脈のように生き続けている。主に藁と土と木でつくるストローベイル・ハウスは、そうした地域の記憶の上に、新しい技術や表現を施していくのに最適な建築であるといえよう。

本研究は地域を歩く素材探しから始め、八王寺組の指導の下、学生たちと一緒に荒土を作り、稲を鎌で刈って稲架（はさ）に掛け、彼らが伐り出した材木に鑿（のみ）でホゾを刻んだ。八王寺組や棚田オーナーとの協同作業やワークショップの目的は、単なる技術の習得にあるのではない。里山の自然と地域に対する愛着と理解を、ものづくりを共有しながら深めることにある。ストローベイル・ハウスが人と人をつなぎ、結を再生するツールとして有効なのはこのためである。

環境の再生とは、単に自然環境を再生することだけではない。環境の再生は、文化の再生なくしてありえないのである。人の

つながりの構築と棚田の保全を同時に進める八王寺組の試みが、より広範な人々を巻き込んだコミュニティとなつて根づく時（文化の再生）、仰木の里山環境の再生も大きく前進するに違いない。多くの人々の汗と地域の記憶が積み込んだ農業小屋は、そのための拠点なのである。

謝辞

本学研究所研究員でもある永江弘之氏には、本研究における学生への指導、研究活動へのサポート、研究の記録撮影等に対するご協力と心強い励ましをいただいた。本学非常勤講師である建築家の水野和子氏には設計図の作成や現場打合せ、学生への指導等の、そしてカイル・ホルツヒューター氏にはワークショップにおけるストローベイル積み・土塗り指導等のご協力を、それぞれ特別講師の立場からいただいた。また、八王寺組上坂雅彦会長と上坂暉彦棟梁はじめ八王寺組の方々には、学生への熱心な指導と研究活動への協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号

発行日 平成26年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937